

特別寄稿

私の回想

諏訪 兼位

日本福祉大学学園顧問 前 日本福祉大学学長

Random Thoughts on Some Phases in the History of the Nihon Fukushi University

Kanenori Suwa

Nihon Fukushi University

Keywords: 情報社会科学部, 半田市, 朝日歌壇, 月出の中央構造線, 課程博士

1. はじめに

日本福祉大学（以下日福大という）は1953年4月に名古屋市内に創立されたので、2003年4月に創立50周年を迎えた。私達の情報社会科学部（以下新学部という）は1995年4月に半田市に創立されたので、2003年4月に8周年を迎えた。ともにおめでたいことである。

私は最初の4年間学部長をつとめさせていただいた。この拙文では、半田キャンパスをめぐる私の回想を、とくに1995年に焦点を合わせながら、意のおもむくままに述べてみたいと思う。

2. 新学部は半田市に（1991）

日福大が新しく情報系の学部を創るという構想は、1989年以降、熱心に議論されてきたようである。私が日福大側の接触をはじめてうけたのは1991年6月であった。新学部の大まかな構想の説明をうけ、それについてのコメントを申し述べた。次第に具体的な提案や人材についてもお話するようになった。事務系の窓口は教育計画室長の丸山悟さんで、間もなく事務局長の渡辺照男さんなどとお会いするようになった。教員系の窓口は経済学部助教授の仁連孝昭さんで、間もなく情報科学センター長の那須野隆一さんや学長の大沢勝さんなどとお会いするようになった。

私が「新学部はどこにつくられるのですか」とお尋ねしたところ、大沢さんは即座に「半田市につくります」と答えられた。この大沢さんの返事をきいた時、私は名古屋大学（以下名大という）停年退職後は、日福大にこうと心に決めたのだった。私は太平洋戦争末期の6ヶ月間、動員学徒として、鹿児島からはるばると半田市にやってきて、中島飛行機半田製作所で、海軍の偵察機「彩雲」をつくっていた。食べるものは少なく、ひどい集団生活で大変な苦勞を重ねた。しかしなぜか半田市は思い出深い土地だったのである。

1991年11月1日（金）に総務理事の山口幸男さんにお会いした。那須野さんや丸山さんなども陪席された。いつもとは様子が異なり、皆さん正座しておられる。まず、本日から新学部発足までの3年5ヶ月間、大学長期計画推進本部顧問を委嘱いたしたいがいかがか、つぎに1992年4月1日以降、新学部の学部長（予定者）として就任いただけるか否か、以上2点の正式打診であった。私はこの山口さんの正式のお申し出を承諾した。あとでわかったことだが、長計本部顧問には、ちゃんとお手当が出るのでおどろいてしまった。早速名大に兼業許可願を申請して承認された。もう他の大学に右顧左眄（べん）することなど許されるものではなかった。

3. 黒猫と鶇（つぐみ）（1991年・1992年）

1991年当時、私の家には黒猫が一匹いた。「クロ」と名付けられたこの黒猫は、すこぶる野性味に富んだ猫であった。4月終わり頃のある朝、起床して居間にはいった私はびっくりしてしまった。20帖ほどの居間いっぱい鳥の羽毛が散らかっているではないか。鳥の頭をみて「クロ」の喰ったのは鶇だと判断した。木立の多い私の家の庭には、ときどき鶇も顔をみせていた。その日の早朝、わが「クロ」どのはまだ暗いなか、鶇におどりかかって見事にくわえこみ、居間に運びこんで貪（むさぼ）り喰ったのである。「クロ」どのは、久しぶりにおいしい生肉にありつき満腹し、その日は朝から夕方暗くなるまで、居間のソファの上に死んだように眠りこけていた。私はアフリカのサバンナで、夜中の狩に成功したライオンをすぐに連想した。狩に成功したあと、満腹のライオンはぐっすり眠りこけるのである。私は一首を詠み、朝日歌壇に投稿した。

朝まだき貪り喰いし鶇一羽
黒猫屋を獅子のごと眠る

という一首であった。

1ヶ月ほどした5月26日（日）の朝日歌壇をみておどろいた。馬場あき子選の第一首に選ばれているではないか。馬場先生の評は次のようなものであった。「猫にとって、つぐみはどの程度の獲物だろう。私も蛇と格闘する猫が死力を尽くすさまに感動したことがあるが、第一首は「獅子のごと」という形容に、自力で獲った生き物を食うというエネルギーの美しさがあり、黒猫の自信に満ちた眠りから野性のかげやきが発散している。」と、大へんに褒めていただいた。

さて、1991年秋に、3週間程度の文部省短期在外研究員の枠が名大に1つまわってきた。当時の早川幸男学長は、3年間の理学部長職を満了したばかりの私に声をかけられた。私は、アフリカ（ケニアと南アフリカ）との学術国際交流の推進のために、1992年1月に3週間、アフリカに出かけることができた。

当時、名大の星野光雄さんが、日本学術振興会のアフリカ地域研究員として、ケニアのナイロビに滞在中であった。1月12日の早朝ナイロビ空港に到着した私は、すぐその足で、1月12、13の両日、星野さんと一緒にマサイマラ国立公園に出かけ、久しぶりにサバンナと野生動物

物を満喫した。13日の夕方、ナイロビの学術振興会のオフィスに戻って、またまたびっくりした。

朝日新聞東京本社学芸部からのファックスが私を待ち受けていた。上に述べた黒猫の拙歌が、1992年の朝日歌壇賞に選ばれたというのである。馬場先生は「私は今年の年間賞（朝日歌壇賞）に諏訪兼位氏の一首をえらんだ。一羽の鶇を捕らえて貪り喰った黒猫の野情の、満ち足りた獅子王のような眠りに、じつに豊かな美しいものを感じたからだ。人間の世の中の醜い戦争や、争いとは別の、自然の摂理に近い生きものどうしのきびしい葛藤が渾身の生のドラマを感じさせ、生きるための本質を惜しみなく発揮したあとの、自負にみちた命のかげやきが美しい。」という推薦文を書かれた。

私の友人たちは、「クロ」に感謝しろと言ったり、残酷な短歌だと言ったり、さまざまであった。朝日新聞に受賞が発表されると、40名ばかりの先輩、友人、知人から、早速、お祝いの手紙や葉書、それに電話がかかってきた。なかには色紙を贈ってくれる人、短歌ノートを贈ってくれる人、お祝い金まで贈ってくれる人もいておどろいてしまった。新聞の威力はまことに大きい。この黒猫と鶇の物語りは、私の名大在職40年の末尾を飾る愉快的思い出となった。

4. 学部長は鹿児島の人（1992年）

1992年4月に、梅原嘉介さん、杉江日出澄さん、藤井保憲さん、それに私の4人が、新学部教員予定者として日福大に採用された。4人とも経済学部教授となったが、教授会に出る必要はなかった。新学部開設委員会が早速立ち上がり、私たち4人の新人のほかに、既存学部の先生たち（那須野さん、岡川暁さん、千頭聡さんなど）や事務当局も加わって、もろもろの相談がはじまった。

半田市長竹内弘さんはじめ半田市当局は、新学部を半田市に誘致したいという考えをもっておられた。さらに具体的に推進するためには、半田市議会の賛成を得る必要があった。

1992年5月16日（土）に、半田市議会協議会が開かれ、日福大側の説明を市会議員の有志の方々にお話しすることとなった。

市会議員30名のうち21名の市会議員が出席したこの協議会では、冒頭の竹内市長の挨拶にひきつづき、大沢学長は開学40周年（1993年）事業の目玉として新学部を開設するものであり、この40年間に日福大は着実に発展を

つづけ、愛知県内の私立大学のなかで、五指にはいる大学として成長したと述べ、情報システム技術者が日本全体として不足している現状を説き、半田キャンパスには、新学部ほかに、知多半島総合研究所を置き、新たに、生涯学習センターと情報社会システム研究所（以下システム研という）を設立し、半田市をはじめ周辺の住民の方々のお役に立ちたいと述べ、美浜キャンパスのある美浜町が、日福大のために活性化したことを強調された。次に学部長予定者の私が立ち、戦時中に鹿児島から半田にやってきて、動員学徒として中島飛行機半田製作所で働いたことを話し、情報科学の重要性をわかりやすく説明した。最後に渡辺事務局長が立ち、文部省に設置申請する準備が着々と進んでいる現状を述べ、半田キャンパス予定地（東生見町）の土地買収が順調に進んでいることを報告された。

私たち3人の説明が終わるや否や、前日の5月15日まで市議会議長であった坂元寛議員の手が高くあがった。一瞬、竹内市長の顔に緊張が走った。

坂元議員は「日福大の3人の方々の御説明をきいて、私は新学部が半田市に開設されることに大賛成であります。ことに学部長の諏訪さんが鹿児島の人だとわかって安心しました。実は私（坂元議員）も鹿児島出身であります。」と発言された。この坂元さんの発言のおかげで、それまでの協議会のやや緊張気味の雰囲気、がらりとかわってしまった。竹内市長さんや大沢学長さんの笑顔が忘れられない。

半田市民10万人のうち、鹿児島出身者が1万人いること、市議員30名のうち、鹿児島出身者が3名いることなど話が弾んだ。

協議会が終わり、当日出席の鹿児島出身の市議員2名（坂元さんと榊原久美子さん）に挨拶し、また輸送機工業KK（戦時中の中島飛行機半田製作所）の村山義信議員さんと挨拶を交わした。

半田市議会協議会は無事に終わった。大沢学長、渡辺事務局長、市川幸夫さん、田中正紀さん、それに私の5人は、半田市内で「うなぎ」を食べ、ビールで乾杯した。大沢学長は「鹿児島の人の団結力はすごいものですね。」と終止にこにこであった。

5. 中央構造線の大露頭（1995年～2003年）

1994年の12月に、新学部設置の正式認可が文部省からおりた。

1995年の正月は、4月からの新学部発足に備えて、気力の充実した落ち着いた日々であった。

正月明けの1月6日に、三重県飯南郡飯高町教育委員会の林田守生さんから私に、「月出部落のワサビ谷に、中央構造線と思われる露頭があるが、是非とも確認してほしい」という電話があった。林田さんと私はお互いに未知の間柄である。しかし、私は二つ返事で、「1月16、17の両日、おうかがいします」と答えた。

実は、40年以上前の1951年12月25日に、名大理学部2年生の3名と一緒に、月出部落付近を巡検し、この付近を中央構造線が走ることを、推定していたからであった。40年以上の歳月を超えて、中央構造線確認のチャンスが到来したのである。私は1951年10月に名大理学部の助手になったばかりであり、3名の学生のひとは、水谷伸治郎さんであった。

1月15日夜、林田さんから、「飯高町は雪がかなり降っているが、どうしますか」という問合せの電話があった。私は「予定どおりおうかがいします」と答えた。予定の16、17の両日をのぼすと、その後のスケジュールがつまっていた。当分行けそうもないと判断した。

1月16日（月）朝、松阪駅には林田さんが出迎えられた。初対面であった。信州大学理学部地質学科を卒業した人であった。幸い雪はほとんど降り止んでいた。

しかし、ワサビ谷に近づくにつれ、雪は次第に深くなってくる。

ワサビ谷の西方の雪の雑木林の斜面を下って、やっと露頭にたどり着いた。そして、中央構造線の見事な露頭であることを確認した。その日の調査は飯高町から林田さんと水谷総助さん、名古屋から私と宮川邦彦さん（名古屋工業大学名誉教授）の4人で行われた。

1月16日の夜は、波瀬部落の山林舎で、飯高町企画課長の増田進一さんも加わっての5人の楽しい夕食会となった。猪（いのしし）のすきやきと鹿の刺身はすばらしい味だった。宮川さんと私はその夜、山林舎に止宿した。

翌朝1月17日（火）午前5時46分、強い地震に眠りを覚まされた。忘れもしない阪神大地震だった。17日朝は快晴となった。林田、水谷、宮川、私の4人で飯高町西端の高見峠（海拔894m）に赴いた。雪が深く、樹氷が殊のほか美しい。東方の三峰山（海拔1,235m）方面を望むと、中央構造線の連続する様子が、地形的にもくっきりとわかった。

そのあと、飯高町役場で村岡力町長さんに会い、月出

部落のワサビ谷の露頭の重要性をお話した。そして、帰名後、中央構造線視察報告書を書き上げて、1月20日に村岡町長さんに送付した。

「現在ワサビ谷の露頭はほとんど崖錐でおおわれているが、崖錐を除去する工事をおこなえば、高さ80mの大露頭が出現する。しかも、向かって右側（南側）の黒色片岩と、向かって左側（北側）のマイロナイト（圧砕岩）の両者が直接に接しており、両者の境界線が中央構造線である」と力説した。

反応は早かった。村岡町長さんはじめ飯高町役場の皆さん、松阪農林事務所林政部長の望月三佐男さんはじめ林政部の皆さんの努力によって、三重県治山事業として、1995年度から3ヶ年計画で、崖錐除去の工事が進められることになった。

1997年5月に訪れた時には、月出部落ワサビ谷の露頭は見事な大露頭になっていた。私は一首を詠み、朝日歌壇に投稿した。佐佐木幸綱先生が激賞され、第一首に選んでいただいた。しかも、1997年の年間秀歌にも選んでいただいた。

崖錐をのぞけば見事あらわるる
大断層が月出ずるごと

という一首である。

私達は、1997年11月に日本地質学会の機関誌に、この月出の大露頭をカラー写真入りで発表した。そして、1999年10月には日本地質学会の巡検が行われ、日本全国各地から集まった約30名の会員は、大露頭の素晴らしさに感動した。

2001年3月には、この月出の大露頭は三重県指定の天然記念物となった。つづいて、2002年12月19日には、国指定の天然記念物「月出の中央構造線」となった。2003年7月6日（日）に飯高町では、国指定を祝って、記念講演会と記念観察会が行なわれた。新学部創立直前から約8年間、大露頭「月出の中央構造線」をはぐくんできたことに対して、私はいささか感慨にふけていた。

中央構造線は日本列島を横断する、1000kmを超える、最大級の断層である。関東地方から中部地方を経て、紀伊半島にいたり、さらに四国を横断して九州にいたる中央構造線のうち、国指定の天然記念物となっている露頭は、2ヶ所しかない。ひとつは愛媛県砥部町にある露頭で、戦前に国指定となった。もうひとつは、私達の「月

出の中央構造線」露頭である。いかに立派な大露頭であるかを理解いただけるだろう。

ここで、日福大と飯高町との関係について触れておこう。1997年12月上旬に、教員3名（水谷さん、鈴木バタマワディーさんと私）、職員2名（津田道明さんと水谷早人さん）、学生21名（3年生10名、2年生11名）、社会人2名（愛知県庁の農林技師）計28名で知多バスを利用して、1泊2日の巡検を行なった。1日目は月出の大露頭を見学し、高見峠から東方の地形を見学した。石橋修町長さんなどからお酒4升の差し入れがあり、大変にぎやかな夕食となった。2日目は津田さんの「古代豪族ワニ氏の十字路」と題する名講義と水谷さんの中央構造線についての名講義があり、そのあと、結晶片岩地帯を巡検した。

1997年7月には、3年生の割田明憲君が、森林組合みえ中央の沖中正組合長さんの配慮によって、森林現場作業（下草刈り）を体験し、立派な卒業研究Ⅰを書き上げた。また、4年生の割田君は、1998年に、月出の大露頭をとりあげ、飯高町のホームページを製作した。

1998年には、3年生の青木一博君と市原綾君が飯高町をフィールドとして卒業研究Ⅰのテーマに取り組んだ。青木君は櫛田川沿いに露出する結晶片岩を研究し、市原君は櫛田川にかかる沢山の沈下橋を研究した。沈下橋というのは、川が増水した時には川の中に没し、川が減水した時には川の上に現れて、対岸との往来ができる橋のことである。

現在、月出の大露頭を素材にして、国際的な第一級の研究が展開していることも、嬉しいことである。すなわち京都大学地球惑星科学科の嶋本利彦教授やケンブリッジ大学のC.A.J. Wibberley 博士などによって研究が進行中であり、すでにその第一報は、国際構造地質学会誌（2003年、Pergamon 社）に発表され、今後の発展が期待される。構造地質学だけでなく、地震学、地震予知の問題にも踏み込んでいる。

6. 新学部の発足（1995年）

新学部発足直前の1995年3月28日（火）に半田キャンパス竣工式が行われ、200余名が参集した。テープカットは7人の人々によって行われた。鈴木宗音学園長、大沢学長、竹内半田市長、石川明半田市議会議長、鴻池組の鴻池一季社長、Interspace Time社の牛建努社長、それに私の7名である。来賓のなかには、半田商工会議所

の小栗圓一郎会頭、輸送機工業の副島晃社長、I.T.社のRobert R. Lowe副社長、半田市の盛井祐治助役、石川勝彦市議、坂元市議、榊原（久）市議、などの皆さんのお顔もあった。当日の記念品として、リコーの懐中時計が、参加者全員にくばられたのにはおどろいた。

さて、1992年4月に新学部教員予定者として赴任した4人（梅原、杉江、藤井の皆さんと私）にひきつづいて、1994年4月には、秋田宗平さんと近藤悟さんが赴任された。社会福祉学部から、那須野さん、経済学部から岡川さんと千頭さん、以上9名のほかに、女子短期大学部から水野暁子さんが実質的に、1995年4月から新学部の教員となられた。水野さんは戸籍上は1996年4月から新学部の教員であったが、

1995年4月新学部発足と同時に赴任された教員は、磯貝芳徳さん、片方信也さん、加藤清さん、唐沢かおりさん、公平珠躬さん、佐々木葉さん、鈴木隆宏さん、陳立行さん、水谷伸治郎さん、水野昇治さん、山崎怜さんの11名であった。

したがって、新学部発足時の教授会構成員は正式には20名、実質上は21名であった。なお、1996年4月に、鶴飼一彦さん、久世淳子さん、久保田競さん、山羽和夫さんの4人が赴任され、1997年4月に、鈴木パタマワディーさん、野呂春文さん、二村敏子さんの3人が赴任され、目出度く、28名の教員が揃うこととなった。

システム研の初代所長は秋田さんがつとめられることとなった。学部長補佐は藤井さん、人間情報コースの主任は秋田さん、環境情報コースの主任是水谷さん、情報システムコースの主任は磯貝さんがつとめられることとなった。研究委員は片方さん、教育委員是水野暁子さん、学生委員は近藤さん、就職委員は杉江さんの皆さんである。なお、杉江さんは情報科学センター長もつとめられた。

半田キャンパス内の事務系職員も優秀な人々が多かった。事務長の市川さん、橋本武司さん、山本勝子さん、斉藤真左樹さん、木野村竹夫さんなどをはじめとする面々であった。

1995年4月には206名の学生が入学した。北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から195名の学生が集い、11名の留学生が加わった。新学部を志願した者は1,914名、受験した者は1,868名であり、349名を合格とし、206名が入学したのである。「情報社会を科学する」学部、また「情報科学と社会科学を総合する」学部を目指す、意

気さやかな私達の熱望に応じて、全国から若者が参集した。男子学生59%、女子学生41%で、女子学生の比率が予想よりも高いのにびっくりした。また、自宅通学の学生は40%、下宿する学生は60%であった。なお、当時の入試は現在よりも種類が少なかった。すなわち、付属高校推薦入試、指定校推薦入試、一般推薦入試、第Ⅰ期入試、第Ⅱ期入試、留学生入試の6種類であった。

1995年4月3日（月）の午後、新学部の第1回教授会を開いた。真新しい建物の中での教授会であり、みんな和気藹々（あいあい）たるものであった。その日の夕方には、食堂Windyの仮オープン・パーティーが開かれ、美浜キャンパスからも、副学長のお二人、宮田和明さんと山口幸男さんがかけつけてきて下さった。

4月4日（火）に、全学の入学式が美浜キャンパスで举行され、そのあと学部別のオリエンテーションがあり、藤井さんの名司会で新学部の新入生の前で、新学部全教員の紹介があった。

4月5日（水）は半田キャンパスで、朝から新学部の本格的なオリエンテーションが開かれた。先ず藤井さんの名講義。マイクロソフト社の社長のBill Gatesやアップル社の初代社長のSteven Jobsなどの名も登場し、インターネット、e-mailの話など大切なお話だった。つづいて磯貝さんが、半田キャンパスの素晴らしさは、建物だけではなく、computer networkがしっかりと秘められていることだと説き、諸君は高校までは農耕型の勉強にはげんできたが、大学では狩人型の勉強にはげめと学生たちを激励された。

4月6日（木）は、朝からカリキュラム研究会が開かれ、この日も藤井さんの活躍が目立った。学生に対する第1回のアンケートに基づいて、新入生206名のプロフィールや進路希望コースを分析し、国際ナショナル・プレゼンテーションのLL教室の問題や情報処理演習Ⅰの進め方などが話し合われた。午後はコース会議が開かれ、ユニット専門演習の件が議論された。午後3時過ぎに、新入生歓迎レセプションが開かれた。大沢学長にもおいでいただいた。学長と事務長の市川さんがこの歓迎会を盛り上げ、新入生も盛り上がった。早くもこの4月6日には、半田キャンパスの学生サークルが誕生した。15人のサッカーのサークルで、女子学生1人がマネージャーをつとめるというのである。

4月8日（土）の午後は、101講義室は大変にぎわった。美浜キャンパスから沢山のサークル関係の学生や教職員

がやってきて、各サークルの宣伝勧誘をした。ラグビー部やアメリカン・フットボール部などは、ユーモアたっぷりでした。

4月10日（月）から、新入生に対する授業がスタートした。私は「自然認識論」を新入生の前で講義した。101講義室には200名ほどの学生がぎっしりとつめかけ、ほぼ満席だった。初回だったので、私の学生生活や教育・研究生生活を話した。最後に、1980年の国際会議の巡検でフィンランドを訪れた折、ヘルシンキ大学の女性大学院生と一緒に撮ったカラー写真を、スクリーンに大きく映写したら、学生は皆どっと笑い、講義終了とともに学生の凄い拍手が湧き起こった。私は長い間、理学部で、10～30名程度の学生を相手にすることになっていた。そんな私は、新学部新入生の逞しいエネルギーを感じた。

私は一首を詠み、朝日歌壇に投稿した。馬場先生に第二首に選んでいただいた。

軍用機作りし学徒たりし地に
半世紀経て新学部創る

という一首である。馬場先生の選評は「戦中に学徒動員で軍用機を作っていた地に、21世紀をになう新学部が創設される。作者の半世紀の軌跡をここに教える身として内省する思いは深い」というものであった。

5月11日（木）に第2回教授会が開かれたが、すでにこの時点で、藤井さんから「学生による授業評価」について提案があり、多くの教員から活発な意見が述べられた。11日の夕方6時から8時30分まで、新任の先生たち11名が、旧任の私たち10名と事務職員の人たちを招待して、デラックスなビアパーティーを開いて下さった。

学生は燃えており、教職員も燃えていた。しかし、学生は1学年しかいないので、半田キャンパスはがらんとして静かであった。先生方も授業の負担が少なく、その分、将来構想や各自の研究に時間を使うことができた。

5月27・28日の両日、日本アフリカ学会の学術講演会が、半田キャンパスで開かれた。当時私はその学会の会長をつとめていた。5月27日（土）には雁宿ホールで学会の公開講演会が開かれ、540名の人々が参加した。その夜の学会の懇親会には竹内市長さんも出席され、盛り上がった。

6月22日（木）は名古屋キャッスルホテルで、新学部の開設記念シンポジウム「21世紀高度情報社会に挑む」

が開かれた。パネリストは田中一札幌学院大教授、戸田厳富士通常務、野口正一日大教授、吉田民人中央大教授、それに日福大の藤井さんの5名。司会は秋田さんがつとめられた。600名の参加者はみな強い印象を受け、シンポジウムは盛会裡に終わった。

7月15日（土）には、同じく名古屋キャッスルホテルで、日福大後援会の文化講演会が開かれた。新学部の片方さんが「くらしと街―阪神大震災に学ぶ―」と題して講演された。みんな、半年前の生々しい阪神大震災を想起して、熱心にきき入った。そこに住む地域の人々が、自分たちの力で街を守ることが大切だと、片方さんは力説された。

7月22日（土）夜は「半田・平和のつどい」が半田市の勤労福祉会館（山方工場跡地）で開かれた。せまい会場にびっしり、150人の全国の人々が集まった。俳優の土屋嘉男氏（山梨県日川中学出身）と私の二人が、「戦争とわが青春」と題してそれぞれ講演し、半田を回想した。

つぎの7月23日（日）は「半田・敗戦犠牲者追悼平和祈念碑」の完成式が、半田市雁宿公園で、盛大に举行された。全国各地から350人の人々が参加し平和を誓った。第2次大戦中、半田市で東南海地震や空襲で亡くなった人々、432人の名前がこの祈念碑に刻まれた。

地質学を専攻する水谷さんと私は、土曜日・日曜日を利用する、学生の野外巡検を計画した。学生に直接自然に触れさせるフィールド・ワークは、通常の講義にも増して、自然への関心と興味をかきたてるものである。6月24日（土）・25日（日）の両日は、兵庫県北部の豊岡市の北にある玄武洞を巡検した。玄武岩の溶岩が地表を流れ、やがて冷却する時に、見事な六角柱状の節理をつくる様相を、まのあたりにして、19人の学生たちは驚いていた。また、11月18日（土）には、知多バスを利用して、東三河の中央構造線に沿って巡検した。39名の学生たちが参加し、とてもにぎやかだった。湯谷（ゆや）で流紋岩の岩脈を見学し、東栄町の煮淵で、川床の花崗岩をえぐって、沢山のポットホール（甌穴）ができているのを見学し、最後は津具溜溜で、「将に行われんとする河流争奪の実例」を見学した。秋晴れの日だった。その折のカラー写真をここに掲載する。



情報社会科学部1年生の秋の日帰り地質巡検。
1年生の2割近くが参加した。写真前列右端は水谷伸治郎さん。1995年11月18日撮影。愛知県湯谷の馬背岩にて。

7. 学長の4年間（1999年～2003年）

本来ならば、1999年3月末に4年間の学部長の任期を終えて、日福大を定年退職するはずだった私は、大沢学長のあとをうけて、4代目の学長に1999年4月に就任することとなった。学長就任時の年齢が70歳以下という条件を、辛うじてクリアした。それから2003年3月末まで、なんとか無事に、4年間の学長任期を満了することができた。これは、全学の皆さんの心からのお力添えがあったからである。心から御礼申しあげる。

4年間の学長在任中には、実にさまざまな事があったが、ここではひとつだけ書きとどめることにしたい。

日福大は1957年に、日本では初めての4年制の社会福祉学部を創設した。それから12年を経て、1969年に「社会福祉学」の名を持つ大学院が、はじめて日福大に誕生した。この大学院は修士課程（博士前期課程）であり、この状態が長くつづいた。そして、1996年4月に、大学院社会福祉学研究科に博士後期課程が誕生した。日福大から課程博士を輩出する条件が、ようやく整ったのである。

私の学長就任と同時に、大学院情報・経営開発研究科が誕生し、2年後の2001年4月に、この研究科にも博士後期課程が誕生した。

課程博士を出せる大学院研究科が、日福大に複数でき

たわけである。

私は、大学のポテンシャルを高め、大学を活性化する具体策のひとつは、素晴らしい大学院学生を育てて、堂々と課程博士の称号を与えることであると信じている。学長就任早々、大学院委員長の久保田さんや社会福祉学研究科長の二木立さんなどに、このことを相談した。そして、めばしい院生を教えてもらって、それらの人々に激励の葉書を書き送った。

しかし、おいそれと博士論文が書けるわけではない。学長任期4年目の秋のはじめに、2人の大学院学生の博士論文が完成に近づいているというしらせをうけて、私はホッとした。そして2003年のはじめに、野口典子さんと加藤悦子さんのお2人に対して、社会福祉学研究科委員会は、博士（社会福祉学）試験の合格を認定された。

2003年3月20日（木）は快晴で風の強い日だった。この日の午後、名古屋キャンパス7階で、課程博士祝賀会が開かれた。先ず野口さんが「高齢者福祉における施設ケアの軌跡と課題」と題する博士論文の骨子を話し、つぎに加藤さんが「介護殺人、介護心中の裁判「事例」研究—高齢者福祉と司法福祉の統合をめざして—」と題する博士論文の骨子を話された。そのあと、野口さんの主査をつとめられた高島 進さんが、野口さんの歴史研究は、実践にまで踏み込んだ歴史研究であり、画期的なも

のであると講評され、つぎに、加藤さんの主査をつとめられた山口幸男さんが、加藤さんの仕事は、判例研究と事例研究とをドッキングした審判例研究であり、経済的には日本学術振興会特別研究員に採用されて幸運だったこと、また日福大の教員同士のチームワークがよかったことも幸いしたと述べられた。

野口さんの夫は、社会福祉学部の野口定久さんである。私はかねがね定久さんに、夕食はできるだけ外食して、奥さんに迷惑をかけないようにと、冗談を言っていた。祝賀会の席上私は、「これからは、夕食はちゃんとお宅でおとり下さい」と言って、定久さんを失望させた。祝賀会のフィナーレが素晴らしかった。加藤さんがアルトサックスで「仰げば尊し」を奏したのである。

なお、この日、国連を無視して、米英軍はイラクに侵攻した。

3月24日（月）の2002年度学位授与式において、野口さんと加藤さんに、一人ずつ登壇いただき、日福大の課程博士第一号と第二号の学位記を、私は差し上げた。そして、「お二人の研究業績は極めて高い水準のものです。お二人にひきつづいて、日本福祉大学から課程博士や論文博士が輩出することを、心から願っています。」と式辞の中で述べた。

情報・経営開発研究科においても、近い将来、是非立派な課程博士を出していただくようお願いしたい。課程博士を出した研究科では、論文博士も出すことができる。

2003年7月17日（木）に、文部科学省の発表があり、平成15年度21世紀COEプログラムの社会科学分野で、日福大が採択された。二木立さんを拠点リーダーとする、「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア拠点」と題する拠点プログラムである。私の学長任期の押し迫った、2003年3月に申請したものが採択されて、大変に嬉しい。日福大の皆さんも大変に勇気づけられたことだろう。大学院研究科の充実、大学にとって大切なことである。